

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00723

研究課題名(和文) 前近代中央ユーラシアの南北交通システムの総合的研究

研究課題名(英文) A comprehensive study on the north-south transportation system of the pre-modern Central Eurasia

研究代表者

船田 善之(FUNADA, Yoshiyuki)

広島大学・人間社会科学研究科(文)・准教授

研究者番号：50404041

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、前近代の中央ユーラシアにおける南北交通の実態、及び当該地域の諸集団による交通システムの構築・維持への主体的な関与のあり方を考察した。具体的には、モンゴル高原と中国本土との間、中国本土とチベットとの間、中央アジアの天山山脈南北、中央アジアと南アジア北部との間の南北交通について、史料とフィールド調査に基づき、交通路とその拠点とそれらの制度・機能・構造を解明した。本研究の成果により、交通の在り方を通時代的に理解し、共通する要因と各々の時代に特徴的な要因を探ることが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

様々な形態・言語の史料の駆使、現地におけるフィールド調査によって、長期的なスパンと広大な地域にわたる中央ユーラシアの南北交通について、交通路とその拠点とそれらの制度・機能・構造を総合的かつ体系的に解明した。積極的に国内外主要雑誌・学会において成果の公表を行い、その成果は国際的にも高く評価された。また、学生・中高教員を主たる対象とする図書(7件)での分担執筆(14件)やテレビ番組の制作協力において、本研究の成果を反映するなど、その社会的意義も大きい。

研究成果の概要(英文)：This research project examines the transportation system in pre-modern Central Eurasia, with a focus on the north-south routes and the contributions of various regional groups to their construction and maintenance. By analyzing historical documents and conducting field surveys, the study provides insights into the transportation routes and hubs, as well as their institutional structures and functions, including those between the Mongolian Plateau and China proper, China proper and Tibet, the Tianshan Mountains in Central Asia and the north and south, and Central Asia and northern South Asia. The study aims to develop a comprehensive and diachronic understanding of the nature and characteristics of transportation systems over time. The findings shed light on the complexity and diversity of transportation systems across different eras, highlighting both continuities and changes.

研究分野：中央ユーラシア史

キーワード：中央ユーラシア モンゴル ステップ ゴビ チベット 天山山脈 交通史 南北関係

1. 研究開始当初の背景

歴史学・現代研究を問わず、異なる地域・集団間における移動や交流の諸相を解明しようとする議論が、以前に増して盛んとなっている中、あらためて関心を集めているのが中央ユーラシア世界とそこに生きた人々の活動である。ステップ地帯の遊牧民は移動を常とし、その機動力を基盤として突厥、吐蕃、モンゴル帝国、ジュンガルのような、多様な地域・集団を統合した遊牧国家を登場させた。また、オアシスに居住する定住民には、「シルクロード」の国際商人として遠隔地交易に従事する者が多く、遊牧国家の政治・軍事力とも結びながら、交易圏の拡大に邁進した。遊牧民・遊牧国家の機動力と軍事力の優位性は、交通路の確保を実現させる重要な要素であり、交通路の掌握による交易圏の拡大は、遊牧・農耕・商業の結合を促進し、巨大帝国成立の前提条件となったのである。以上のような歴史性・地域性から、中央ユーラシア史研究において交通の問題は重要かつ伝統的なテーマとなってきた。

しかし、中央ユーラシアの交通に関する研究には、時代や地域を問わず、大きな欠落が存在する。例えば、一般に「シルクロード」の名称で表現される内陸ルートは、およそ「東西」の交通・交易をもって理解されることが多い。これに対して、「シルクロード」は東西をつなぐ線ではなく、ユーラシア全体に広がる「東西南北」の交通・交易のネットワークであるという見解が提示されているものの、「南北」の交通をとりあげた検討は未だ少なく、研究上の不均衡は解消されていない。また、遊牧民と定住民の間における南北関係は、中央ユーラシアの歴史展開を理解する上で重要な視点だが、草原・砂漠・山脈で隔てられていた両者間の人的・物的関係を下支えしていたであろう、南北の交通システムへの関心は低調である。そもそも、各地域の主要な南北幹線は果たしてどこを走っていたのか、それらは各時代でどのような変遷をたどったのか、という基本的な問題すら解明されていない。

交通とは、単に人の往来や物資の輸送を意味するだけでなく、当該地域の政治・社会・経済関係に大きく規定され、また政治権力による交通の掌握は地域支配や秩序形成と密接に関連する。それ故、中央ユーラシア南北交通の問題の追究は、当該地域のネットワークの全容解明に寄与するだけでなく、集団の離合集散、国家支配の進退、社会変容のプロセスを解明するための重要な視座となる。また、ユーラシアにおける気候帯や草原・砂漠・山脈・河川の形状や分布からいえば、東西の移動に際する地理・気候条件の変化は、南北に比べて小さい。逆に、南北の交通は異なる気候帯の突破、渡河や峠越えをとめない、交通の安全性の確保は、より重大な問題として当事者らに認識されていたはずである。中央ユーラシアの南北交通の研究は、人々が厳しい自然環境をいかに克服してきたのか、人々が移動手手段の確保をめざした動機は何だったのかという、人類史の根幹にかかわる学術的問いとして設定されるのである。

2. 研究の目的

本研究は、前近代の中央ユーラシアにおける南北の交通の実態、及び中央ユーラシア諸集団による交通システムの構築・維持への主体的な関与のあり方を、共同研究を通じて解明し、また南北の交通システムの変遷から当該地域の政治・社会・経済状況を照射することで、中央ユーラシアのダイナミックな歴史展開の総合的な把握を試みるものである。

中央ユーラシア史の研究における交通の問題の重要性は、遊牧民、隊商(キャラバン)、巡礼者などを主要な研究対象としてきたこともあり、早くから認識されてきた。その認識は、移動や越境をキーワードとする分析の視点が人文学全般で重視されるようになった近年、ますます強まっている。しかし現状においては、対象とする時代・地域を異にする各研究者の個別検討の域にとどまっており、特に南北の交通に着目する研究は手薄である。そこで本研究は、中央ユーラシア史研究の分野において第一線で活躍する中堅・若手の研究者を結集し、共同研究を実施する。

3. 研究の方法

本研究では、中央ユーラシアの南北交通の地域性・時代性を比較検討するため、モンゴリア・チベット・中央アジアの三つの地域を考察の主たる対象地域に設定し、また中世・近世前半・近世後半の三つの時代区分(区分名称は便宜的なもの)を設ける。研究代表者の船田は、キタイ(契丹、遼)帝国からモンゴル帝国(大元)を対象として、軍事遠征及びヒト・物資の移動とそのルートの実態解明、通時的な南北関係の構造の描出を担当するとともに、研究全体を統轄する。鈴木と中村は、モンゴリアの遊牧民による唐や清への朝貢・宮中参内、及び当時の駅伝路の復元について研究を進める。ゴビ砂漠・陰山をはさんでモンゴリア・中国本土を結ぶ交通路については、近年キャンプ地や水の補給地といった交通の要衝がマイクロレベルで比定されつつあり、各時代の情報・知見を比較・統合することにより、その再構築を加速化することが可能となる。古チベット語文書を利用した研究の第一人者である岩尾、モンゴル時代チベット交通史の専門家である山本、清代チベット史を専門とする岩田は、南方の河西オアシスや大都・北京とチベット間の交通とそれにおける人の移動の政治的・社会的背景、文化接触について考察する。チベットからみた南北交通は最も研究が進んでいる分野であり、モンゴル帝国期(元代)のジャムチ関係史料にもチベットに関する記述が多く含まれることから、本研究では比較検討作業の中心的役割も担う。中央アジアの南北交通は、天山山脈やパミール高原などの峠越えがポイントとなる。具体

的には、中央アジア・新疆史を専門とする小沼が北部ルート(イリ・ヤルカンド・ラダック)を、カシミール史を専門とする小倉が南部ルート(カシミール・ラダック)を担当し、隊商・物資の往来だけでなく、スーフィー教団の広がりや山岳信仰などの側面にも検討を加える。以上については、個別に研究を行うのではなく、それぞれの研究者が縦横に連携・共同して課題に取り組む。

中央ユーラシアの南北交通は不明な点が多く、いかなる人物・集団が、いつどのような目的・方法・経路で移動したのか、といった基礎情報の確認作業から開始せねばならない。情報の集積と統合自体が研究上重要な知見をもたらすものだが、より有機的に共同研究を進めるべく、各メンバー及び関連研究者による報告からなる研究会を開催し、必要に応じて文献講読といったセミナー形式の研究会も企画し、問題関心と追求課題の共有と発展を図る。

本研究は多様なレベルの政治権力を対象とするが、国家レベルでは、交通の掌握と地域支配の関連性において、社会秩序の形成・再編・崩壊がいかにして展開したかを検討する。ローカルなレベルでは、遊牧首長・宗教指導者・駐留官兵等がどのように交通路の治安維持、交通インフラの管理・運営にコミットしていたのか、地域性の相違に留意して分析する。また、比較に必要な情報の収集のため、海外における史料調査と、現地に残る南北交通の歴史的痕跡(城塞、関所、宿場、駅、ディアスポラ=コミュニティ)の実地フィールド調査を行う。

以上のような調査と研究を積み重ねた上で、南北交通が中央ユーラシアの広域的な歴史的動態の中でいかなる意義を有していたのかを、東西交通との関連も視野に入れて系統的・総合的に解明し、当該分野の今後の発展に寄与させる。

4. 研究成果

(1) フィールド・博物館調査とその成果

海外におけるフィールド・博物館調査を4回実施した。その具体的な内容は以下の通りである。まず、2018年8月にモンゴル国において、南北交通に関わる遺跡と遺物を調査した。匈奴・漢から突厥・唐・ウイグル、モンゴル帝国などを経て、清そして近代に到るまでの、城郭・寺院・交通に関する史跡、石碑や岩壁銘文などの文字資料、博物館展示の遺物資料を、実見・撮影(ドローン空撮を含む)および現地の牧民からの聞き取りによって調査した。具体的な調査地点は、歴代の遊牧国家が本拠としたモンゴル高原屈指のオルホン渓谷に点在する遺跡・寺院(エルデニゾー、カラコルム遺跡、ホショーツァイダム遺跡、カラバルガスン遺跡、タイハル岩墨書群、ツェツェルレグ寺院跡)とそこからゴビ砂漠を経由して中国本土に向かって伸びる古代・中世・近世の駅路・隊商路に位置する遺跡(フレンハイルハン摩崖「封燕然山」銘文、トシェート王旗寺院跡、隊商路遺跡、デル山銘文、デル山寺院跡)である。また、カラコルム博物館・ホショーツァイダム博物館・国立民族歴史博物館・ガンダン寺・ボグドハーン宮殿博物館・チョイジンラマ博物館に展示される交通史・都市遺跡・宗教に関する文化財を調査した。これらと並行して、オルホン川とその支流タミル川、オング川、トーラ川などの水系、タイハル岩、フレンハイルハン山、デルゲルハンガイ山、デル山といった、交通に密接に関連する景観やランドマークの確認を行った。以上を通じて、北のステップ地帯と南のゴビ地帯とを結び、さらに南の中国本土へつながる交通路を復元するための重要な情報を獲得することができた。

さらに、2019年9月にもモンゴル国における南北交通史跡の調査を行った。モンゴル国立大の研究者の協力を得て事前情報、調査資料の収集を行い、ウムヌ・ゴビ県、道中のドンド・ゴビ県において交通史跡を調査した。広範な調査ができたが、特に2018年に調査できなかったデル山の南北(南はウムヌ・ゴビ県、北はドンド・ゴビ県になる)を精査することができ、補完するデータを収集することができた。

以上の調査を通じて、以下の成果が得られた。第一に、オルホン渓谷からゴビ地域に点在する、石碑や岩壁銘文を直に確認し、これまでメンバーが構築しているデータをより精緻にしていくための情報を獲得した。第二に、ステップ地帯におけるカラコルム首都圏における統治者の定期移動ルート、さらにはゴビ地帯に及ぶ中国・河西へ向かう重要交通路の一部を踏査することにより、文献史料をより立体的に分析するために必要な、都城遺跡・景観・植生や水資源の補給の問題に関する現地情報を得ることができた。第三に、モンゴル国南部における清代の駅路とその周辺に存在する寺院や隊商路の痕跡を調査した。その結果、寺院跡や地域の伝承を丹念に追い、その成果を文献や地図などと照合することで、清代の南北を結ぶルートを部分的に復元できることが判明した。今後、モンゴル高原における南北のルート、行き交う人々の具体的な様相をさらに多角的に分析し、前後の時代と比較することが可能となった。

次に、2019年8月末から9月初めにかけて、中国青海省アムド・カム地域の西寧から玉樹に至る南北交通に関わる遺跡と遺物を調査した。古代チベット帝国(吐蕃)・唐からモンゴル・ジュンガルなどを経て、清に至るまでの、城郭・寺院・交通に関する史跡、石碑や岩壁銘文などの文字資料、博物館展示の遺物資料を調査した。具体的な調査地点は、西寧から玉樹に至るいわゆる唐蕃古道に沿って点在する河川・峠・遺跡・寺院(黄河・長江上流域と通天河渡口(白塔渡口)などの渡河地点、日月山、バヤンカラ山脈の峠、青唐古城、虎台遺跡、西寧古城、貴徳古城、石堡城、白城子(察罕故城)、大仏寺、タール寺、玉皇閣、文廟、瞿曇寺、文成公主廟、勒巴溝、新寨嘉那嘛呢石堆、ジェク寺)である。また、湟中県河湟文化博物館・湟源県古道博物館・民和県博物館に展示される交通史・都市遺跡・宗教に関する文化財を調査し、青海民族大学のチベット語文献の文献室を見学し、史料収集状況を確認した。これらと並行して、黄河・長江の上流域の水系とその渡河地点(通天河渡口)、日月山(ニンダーラ、グング・メル山)、バヤンカラ峠な

ど、交通に密接に関連する景観やランドマークの確認を行った。

以上の調査を通じて、チベット高原の農耕・牧畜地帯を貫き、フフノールのステップ地帯、河西回廊の農耕地帯、さらにモンゴル高原・トルキスタンや中国本土へつながる交通路を検討するための重要な情報を獲得することができた。すなわち、古代チベット帝国・唐代からモンゴル時代を経て清代に至るチベットと中国世界をつなぐ交通路の復元のための具体的な現地情報と史資料である。そして、青海・チベット間交通における黄河・長江の夏季の水量と家畜を利用した渡河の問題を把握するとともに、前近代の渡河地点に形成された史跡や移動に関わる石碑などの情報を収集した。

最後に、2022年8月、パキスタン・イスラム共和国のインダス川上流域における主要な南北交通史跡を調査した。具体的な調査地点は、スカルドゥ・ギルギット・カプルー・チラスを結ぶ主としてインダス水系に沿う交通路とそこに点在する峠・城塞遺跡・仏教遺跡・岩壁銘文・宗教施設である。この交通路は北上してクンジュラブ峠を越えて東トルキスタンのオアシス都市カシュガル(中国新疆ウイグル自治区)へとつながり、中央アジアと南アジアをつなぐ中央ユーラシアにおける重要な南北交通路の一つである。交通史跡に加え、当時の交通と交流を考察するために重要な資料となる北魏時代と推定される漢文銘文、古チベット語岩石碑文や摩崖仏・岩絵など仏教関連の遺物も調査した。古チベット語岩石碑文については、先行する調査による碑文テキストを改善することができた。あわせて古代の巡礼路と交通路について考察することにより、インダス川沿いの交通路について具体的なイメージを得ることができるとともに、碑文の作成過程についても議論をすることができた。

なお、COVID-19 流行の影響を受け、海外調査が困難となった期間、海外におけるフィールド調査を代替・補完するために、南北交通に関連する北海道・東北地方の史跡及び関連する博物館を調査した。

2度実施した北海道における調査では、北海道博物館・北方民族博物館・国立アイヌ民族博物館・知内町郷土資料館・松前町郷土資料館・松前城資料館・市立函館博物館・函館市北方民族資料館及び関連する遺跡などにおいて、オホーツク人・アイヌ人の考古・歴史・文化に関する調査を行った。かつて大陸・サハリン方面から南下してきたと推定されている海洋狩猟集団・オホーツク人が居住していたオホーツク海沿岸地域では、モヨロ貝塚を始めとする代表的な遺跡を巡検し、靺鞨・女真文化との関連性をもつ出土遺物も実見できた。国立アイヌ民族博物館では、サハリン島から北海道にかけて分布し、大陸とも深い関わりを有したアイヌの歴史・言語・文化について理解を深め、かつ当博物館の開館当初の状況を確認できた。市立函館博物館では永楽11年(1413)「勅修奴児干永寧寺記」拓本を、函館市北方民族資料館では、常設展及び特別展「北のシルクロードと蝦夷錦：炭素14年代測定で明かされた蝦夷錦の製作年代」を見学した。

東北地方では、現在の岩手県・秋田県に残る古代日本の城柵遺跡(志波城、徳丹城、丹沢城、秋田城、弘田柵)において調査を実施した。いずれの城柵もかつての水運の要衝に築かれており、軍事と交通の関連性について明確なイメージを得ることができた。

中央ユーラシアにおける南北交通を軸にその移動・交流の解明にあたっては、中央ユーラシアに含まれる、あるいはそれと隣接する森林地帯における諸集団の歴史と文化の把握は不可欠である。これらの調査を通じて、中近世においてアムール川流域とも交易など密接な関係を展開し、また13世紀のモンゴル帝国のサハリン攻撃とも関わりのある、オホーツク人やアイヌに関する遺物と遺跡について理解を深化させることができた。

(2) 史資料とフィールド調査から得られた情報の対照・分析

まず、各メンバーは、基礎的な作業として、それぞれが分担する時代・地域の典籍・写本・石刻・文書・档案・旅行記および考古発掘報告など各種資料の収集・整理ならびに読解・分析を進めた。次に、先行研究を参照しつつ、主要な交通路及び軍事遠征ルートの復元、峠・関所や渡河地点など軍事・交通の要衝の比定、これら交通路を移動した事例の個別検討と移動したヒト・モノ・情報の考察を行った。そして、現地牧民からの聞き取りやドローン空撮画像を含め、フィールド調査から得られた情報・知見や衛星画像と対照させることにより、これらの交通路や軍事遠征ルートの復元及び軍事・交通の要衝の比定について改めて検証した。以上により、匈奴・後漢時代から突厥・唐及びモンゴル時代を経て清代に至るまでのモンゴル高原と中国本土を結ぶルート、古代チベット帝国(吐蕃)・唐時代からモンゴル時代を経て清代に至るまでのチベットと中国本土を結ぶルート、中央アジアと南アジアを結ぶルートや、天山山脈を越える峠について、より精度を高めて把握することが可能となり、これらのルートをめぐる様々な歴史的知見を得ることができた。

これらの成果については、随時、研究会において報告を行い、メンバー間で共有し、議論を深化させた。延長した期間も含め、5年間で12回の研究会(うち2回は他のプロジェクトとの共催)、3回の共催研究会を開催した。本研究は、紀元前後~20世紀初頭という長期スパン、中央ユーラシアとその隣接地域という広大な地域を対象としているため、その成果は多岐にわたるが、中核的かつ代表的な成果は、以下のようにまとめられる。

第一に、ゴビ砂漠を挟むモンゴルの南北で活躍した阿史那思摩の活躍を概観した。彼の後半生の活動拠点は南モンゴルのオールドスであったが、それを可能にした要因のひとつとして、遊牧を可能にし、かつソグド系の集団の存在も許すオールドスの環境をあげた。交通という観点からは、オールドスが南北モンゴルに接壤し、かつ中原地帯や東北の朝鮮半島にも通じる空間であること

を見出し得るものである（鈴木宏節「阿史那思摩 隋唐帝国に翻弄されたテュルク武人」）。

第二に、9世紀以降北西チベットのアムド地域において、廓州（現在のチェンザ）が仏教界のみならず政治的・軍事的にも重要な拠点として機能していたことを明らかにし、あわせて当時の交通路の一端を明らかにすることができた（Kazushi IWAO, “Gog-cu as Tibetan Buddhist Site of the North-Eastern Amdo Area during the Post-Imperial Period”）。

第三に、ウイグルからモンゴル帝国に至る中央ユーラシア東部とその隣接地域における覇権の重心の遷移を描出し、その展開の要因の一つとして南北交通とその拠点を位置づけ、それらの背景を政治史のみならず、帝国の地域開発と環境の面からも考察した。覇権国家の政治中心の移動が主要交通路の変遷に大きく作用していたのである。そして、それぞれの時代の特徴を明確にするとともに、通時代的に共通する当該地域の南北関係の状況も解明した。すなわち、物資の南から北への移動、農牧境界地帯における遊牧騎馬軍団の配置である（船田善之「キタイ・ジュルチェン・タングト・モンゴル：覇権の遷移とその構造」）。

第四に、モンゴル時代における公的交通制度の具体像の復元をめざし、当該時代の典籍史料の分析を行った。モンゴル時代は東西のみならず、南北をつなぐ交通路線も広く張り巡らされて機能していたが、政府はその維持管理に苦心していたことが改めて明らかになった（山本明志「ジャムチを使うひとたち」）。

第五に、カシミール史料が記述する、1532～1533年のモグールの遠征時の、カシミール盆地内における移動ルートやカシミール人との戦闘地を分析し、カシュガル・チベット・カシミールを結ぶ南北交通路における移動の事例を提示するとともに、当該史料群の重要性を確認した（小倉智史「カシミール史料におけるミールザー・ハイダル」）。

第六に、2019年の現地調査と清朝史料の活用により、清代チベット・青海間の複数の交通路の存在とそれらの特徴を、移動に利用する家畜種や糞の利用に着目して浮かび上がらせるとともに、清朝が交通路上の治安の問題を解決できず、18世紀後半以降は実質的にツァイダム盆地経由のルートに一本化していたことを明らかにした（岩田啓介「清代チベット・青海間交通路の変容」）。

第七に、天山山脈を越える幹道であったムザルト峠を通じた南北交通について、特にポスト・モンゴル期からジュンガル期（14世紀～18世紀）の利用実態を検討した。そして、天山北方の遊牧国家ジュンガルが、ムザルト峠を通じて貢納物・商税・人的資源（商人、農奴）など、天山南方のオアシス社会が生み出す富を吸い上げ、国力の充実をはかっていたことを明らかにした（小沼孝博「ムザルト峠を越えて：天山南北交通史序説」）。

第八に、清代の駅路のうち、北京とフレーを結ぶ南北幹線路の変遷や実態を、国際共著論文で解明した（中村篤志, Sh. ムンフバートル「清代モンゴルのフレー以南14駅路に関する基礎的考察」）。また、モンゴル国南部における通称ハラチン駅路の地域社会における位置付け、現在に至る歴史的変遷などを明らかにした（中村篤志「駅路の守人：モンゴル国ハラチン集団の歴史と記憶」）。これらの成果により、清代交通路について、文献や地図、現地調査、聞き取り調査を組み合わせた多角的分析が、有効であることを示した。

ユーラシアの草原地帯において、交通の痕跡を見出すことは困難であると想定されたが、文献資料だけでなく、現地における地形調査や伝承の聞き取り調査が有効であること、清代の交通路が今も使われている、地域に記憶されていることが明らかになった。遊牧地域においても、交通は縦横・自在に行われていたのではない。特に、南北の移動を考えた場合、非遊牧民による移動という要素が入ってくる。非遊牧民が含まれる隊商や使節、軍隊それらの荷駄が効率良く通れるルートはある程度限定されるものであり、そのルートに付随して宿駅や寺院、町が形成されることで、結果として現代に至るまで変化することなく使われ続けていたと考えられる。

本研究の成果により、交通の在り方を通時代的に研究し、共通する要因と各々の時代に特徴的な要因を探ることが可能となった。中央ユーラシア史を南北関係として捉える視点が重要であることは自明であるが、その際に、このような基礎的インフラとしての南北交通路の在り方、通時代の特徴を解明する必要性はさらに深まったといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計39件（うち査読付論文 17件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 岩田啓介	4. 巻 102
2. 論文標題 清代チベット・青海間交通路の変容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ言語文化研究	6. 最初と最後の頁 5-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/116714	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小沼孝博	4. 巻 143
2. 論文標題 ムザルト峠を越えて：天山南北交通史序説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東方学	6. 最初と最後の頁 61-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小沼孝博	4. 巻 65/66合併号
2. 論文標題 1795年におけるコーカンド使節と清の交渉：清代カシュガリアの政治・外交空間	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北学院大学論集 歴史と文化	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中村篤志	4. 巻 130/5
2. 論文標題 2020年の歴史学界 回顧と展望 : 内陸アジア2	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 265-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazushi Iwao	4. 巻 60
2. 論文標題 Gog-cu as Tibetan Buddhist Site of the North-Eastern Amdo Area during the Post-Imperial Period.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Revue d'Etudes Tibetaines	6. 最初と最後の頁 161-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本明志	4. 巻 130-4
2. 論文標題 新刊紹介：村岡倫編『最古の世界地図を読む：『混一疆理歴代国都之図』から見る陸と海』（龍谷大学アジア仏教研究叢書16）法蔵館、2020年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 107-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小沼孝博（那日蘇訳）	4. 巻 8
2. 論文標題 清代乾隆朝扎哈沁之動態	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Oyirad Studies / 衛拉特研究	6. 最初と最後の頁 8-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Onuma Takahiro	4. 巻 19
2. 論文標題 Manchu Words Referring to the Qing Emperor: han and ejen	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Saksaha: A Journal of Manchu Studies	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi OGURA	4. 巻 2022(4)
2. 論文標題 Nurbakhsh, Muhammad	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Encyclopaedia of Islam, THREE	6. 最初と最後の頁 139-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi OGURA	4. 巻 2022(4)
2. 論文標題 Nurbakhshiyya	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Encyclopaedia of Islam, THREE	6. 最初と最後の頁 142-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田啓介	4. 巻 68
2. 論文標題 1750年チベット政変前夜の清朝・チベット・青海モンゴル関係 ギュルメ=ナムギエル家の婚姻をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本西藏学会々報	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本明志	4. 巻 131-5
2. 論文標題 2021年の歴史学界：回顧と展望 内陸アジア ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 267-272
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 23
2. 論文標題 漠北回鶻汗國の突厥碑銘 希内烏蘇碑北面銘文的再討論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 域外漢籍研究集刊	6. 最初と最後の頁 339-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 船田善之	4. 巻 30
2. 論文標題 イスタンブル・エディルネ旅日記：コロナ禍初期における海外渡航を振り返って	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 シルクロード	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小沼孝博	4. 巻 35
2. 論文標題 堀直先生を偲んで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 内陸アジア言語の研究	6. 最初と最後の頁 113-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村篤志	4. 巻 12
2. 論文標題 清代モンゴルの駅衛門サイロス：現地調査からみた遺構の分布状況	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア流域文化研究	6. 最初と最後の頁 99-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾一史・坂尻彰宏	4. 巻 15
2. 論文標題 歸義軍政權初期におけるチベット語公印の使用とその背景 Pelliot tibe_tain 1171の検討を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 97-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本明志	4. 巻 Apr-79
2. 論文標題 「サキャバ時代」から「パクモドゥバ時代」へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 37
2. 論文標題 2019年度モンゴル国突厥関連遺跡調査筋記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神女大史学	6. 最初と最後の頁 49-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Ogura	4. 巻 12/2
2. 論文標題 In This Corner of the Entangled Cosmopolises: Political Legitimacies in the Multilingual Society of Sultanate and Early Mughal Kashmir	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Persianate Studies	6. 最初と最後の頁 237-260
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/18747167-12341338	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾一史	4. 巻 720
2. 論文標題 多民族国家としての古代チベット帝国	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史と地理	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 舩田善之	4. 巻 33
2. 論文標題 モンゴル時代漢語文書史料について：伝来と集成によって広がる文書史料の世界	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 内陸アジア言語の研究	6. 最初と最後の頁 27-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 舩田善之	4. 巻 300
2. 論文標題 モンゴル帝国の定住民地域に対する拡大と統治：転機とその背景	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazushi IWAO	4. 巻 61 (1)
2. 論文標題 Dbus mtha': Centre and Periphery in the Old Tibetan Empire	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Central Asiatic Journal	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾一史	4. 巻 33
2. 論文標題 古チベット語文書の行政術語 dbyang(s), dkyigs, spad	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 内陸アジア言語の研究	6. 最初と最後の頁 77-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩尾一史	4. 巻 146
2. 論文標題 チベット支配下の敦煌における都督	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 龍谷史壇	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩尾一史	4. 巻 2
2. 論文標題 敦煌チベット語文書にみえる古代チベット帝国治下の授戒儀式	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界仏教文化研究	6. 最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本明志	4. 巻 128(2)
2. 論文標題 新刊紹介：白石典之著『モンゴル帝国誕生 チンギス・カンの都を掘る』（講談社選書メチエ 652），講談社，二〇一七・六刊	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 104-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Onuma Takahiro	4. 巻 1/2
2. 論文標題 Dispatch of the Nusan Mission: The Negotiations between Qing and Ablay in 1757	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 GLOBAL-Turk	6. 最初と最後の頁 55-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小沼孝博 (呉阿木古冷訳)	4. 巻 11
2. 論文標題 清朝統一準ga爾及其管轄制度設計	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国边疆民族研究	6. 最初と最後の頁 210-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小沼孝博	4. 巻 59
2. 論文標題 清末ホヴド地区における清朝統治の再編とカザフ人	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北学院大学論集 歴史と文化	6. 最初と最後の頁 85-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Onuma Takahiro	4. 巻 76
2. 論文標題 The Shift in Qing-Kazakh Relations: The Qing Western Territory in the 1770s	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko	6. 最初と最後の頁 35-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi OGURA	4. 巻 96
2. 論文標題 Persian Historiography of Kashmir during the Gahangir Period I: The Intihab-i Tarihi Kasmir	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ言語文化研究	6. 最初と最後の頁 145-293
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小倉智史	4. 巻 90
2. 論文標題 まだ見ぬ等価を求めて ムハンマド・シャーハーバーディーの翻訳ストラテジー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 イスラム世界	6. 最初と最後の頁 29-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小倉智史	4. 巻 826
2. 論文標題 14世紀イランに伝えられたインドの歴史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 56-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小倉智史	4. 巻 88
2. 論文標題 カシミール史料におけるミールザー・ハイダル	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西南アジア研究	6. 最初と最後の頁 20-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村篤志	4. 巻 4
2. 論文標題 清朝治下ハルハ=モンゴル社会における人の移動と駅	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北東アジア研究 別冊	6. 最初と最後の頁 163-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村篤志、ムンフバートル	4. 巻 34
2. 論文標題 清代モンゴルのフレイ以南14駅に関する基礎的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 内陸アジア史研究	6. 最初と最後の頁 95-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 709
2. 論文標題 【歴史と場】第35回 ゴビ沙漠 南北のモンゴルをつなぐ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究月報	6. 最初と最後の頁 6-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計59件(うち招待講演 35件/うち国際学会 22件)

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 回回館から回子官学へ：清朝宮廷におけるアラビア文字言語の訳員養成
3. 学会等名 中国ムスリム研究会 20周年記念大会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 新疆オアシスの農村・水利・行政
3. 学会等名 第5回比較水利史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 『清代回疆社会経済史研究』の出版とその意義
3. 学会等名 日本中央アジア学会2021年度年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 舩田善之
2. 発表標題 近年における「色目人」研究の展開：「漢人」形成史への展望を兼ねて
3. 学会等名 中国四国歴史学地理学協会2021年度大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩田啓介
2. 発表標題 18世紀中葉の清朝・チベット・青海モンゴル関係の一齣：ギェルメ＝ナムギェル家と青海モンゴル河南親王家の婚姻をめぐる
3. 学会等名 第69回日本チベット学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazushi Iwao
2. 発表標題 Digitization and Text Database: From the Case of Old Tibetan Studies
3. 学会等名 Invisible East (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 舩田善之
2. 発表標題 農牧接壤地帯と「東北ユーラシア」：ウイグル帝国からモンゴル帝国に至る歴史叙述のための地域区分
3. 学会等名 中国四国歴史学地理学協会2022年度大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 舩田善之
2. 発表標題 ウイグルからモンゴルに至る諸帝国の首都・拠点とその移動圏の変遷
3. 学会等名 2022年度広島史学研究会大会東洋史部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 舩田善之
2. 発表標題 モンゴル帝国のターニング・ポイント：オゴデイとクビライ
3. 学会等名 令和4年度 広島市立図書館・広島大学図書館 連携講演会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 清朝の対中央アジア国書に関する基礎的研究：テュルク語文面とその作成者たち
3. 学会等名 2022年度明清史夏合宿（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 乾隆四十二年の扎哈沁旗再編
3. 学会等名 滿文文献与清史研究国際學術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 滿文中用以指代清朝皇帝の兩個詞：han（汗）、ejen（厄真）
3. 学会等名 中央研究院歷史語言研究所專題講演（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 1871年清朝與阿古柏伯克交渉始末
3. 学会等名 中央研究院近代史研究所西学與中国研究群午餐講演（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 前近代インドにおける一元論とスーフィズム
3. 学会等名 第61回現代中東イスラーム世界・フィールド研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Satoshi OGURA
2. 発表標題 Non-Muslim Heroic Conquerors in Persian Historical Narratives: The Cases of Indic Rulers
3. 学会等名 34. Deutscher Orientalistentag (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 私の博士論文
3. 学会等名 2022年度 中東 イスラーム研究セミナー (第23回)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 アクバル版Laghuyogavasthaペルシア語訳における翻訳者ファルムリーの思想的立場 サリーム版との比較を中心に
3. 学会等名 インド思想史学会第29回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 アジア時空間データベースを用いたインドにおける仏教終焉研究の可能性
3. 学会等名 アジア時空間データベース：研究データの公共的利用に向けて
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 スラトラーナ攷 神の鎧か西夷の号か
3. 学会等名 基幹研究「記憶」のフィールド・アーカイビング：イスラームがつなく共生社会の動態の解明」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Keisuke Iwata
2. 発表標題 Pastoralism in Nakchu acted as a transportation base between Tibet and Mongolia in the early modern period
3. 学会等名 16th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 モンゴル国ドンドゴビ県の清代駅舎寺院をめぐって
3. 学会等名 東北大学東北アジア研究センターモンゴル・中央アジア研究分野研究会 近世内陸アジア史の展開 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kazushi Iwao
2. 発表標題 Local Military Governments (khrom) in the Hexi Area and “The Great Military Government” (khrom-chen-po) in Long-cu
3. 学会等名 清華大学人文学院成立10周年院慶活動漢藏佛教語文学系列講座（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazushi Iwao
2. 発表標題 Official Square Seals of the Old Tibetan Empire: Official Seals and Documents
3. 学会等名 16th Seminar of International Association for Tibetan Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本明志
2. 発表標題 モンゴル帝国の衝撃：世界は、日本は、どう受けとめたのか？
3. 学会等名 令和4年度西宮市生涯学習大学「宮水学園」マスター講座 後期（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木宏節
2. 発表標題 阿史那思摩 隋唐帝国に翻弄されたテュルク武人
3. 学会等名 「前近代ユーラシア世界における広域諸帝国の総合的研究：移動する軍事力と政治社会」連続オンラインワークショップ
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 舩田善之
2. 発表標題 色目人再論：「元代四階級制」説のその後
3. 学会等名 第75回東洋史学研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 天山を越えて：ムザルト峠とその役割
3. 学会等名 研究会「ユーラシア遊牧民の地図史」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩田啓介
2. 発表標題 清代チベット・青海間交通路再考
3. 学会等名 第56回社会文化史学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 駅店の守人：モンゴル国ハラチン集団の歴史と記憶
3. 学会等名 『北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響』総括シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本明志
2. 発表標題 チベット語典籍史料における時代区分意識：サキャ派時代とパクモドゥ派時代
3. 学会等名 「チベット文明の継承と史的展開の諸相」2020年度第3回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本明志
2. 発表標題 教科書の記述をつなぐチベット通史：チベット史研究のいま
3. 学会等名 2020年度大阪府高等学校社会 [地歴・公民] 科研究会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 舩田善之
2. 発表標題 蒙元帝国的統治秩序：再論色目人
3. 学会等名 色目 (回回) 人与元代多元社会国際學術研討会暨2019年中国元史研究会年会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 舩田善之
2. 発表標題 鉄門関の南と北：2019年3月ウズベキスタン巡検記
3. 学会等名 第56回野尻湖クリルタイ [日本アルタイ学会] (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 結集するハラチン・ディアスポラ：遊牧社会における駅の諸相
3. 学会等名 国際シンポジウム「清帝国におけるモビリティ再考：モンゴルの場合」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 留まるモンゴル人・行き交う漢人：清代の駅・隊商路をめぐる
3. 学会等名 山形大学人文社会科学部公開講演兼研究成果報告会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 モンゴル高原を空から見る：ドローンを使った歴史研究
3. 学会等名 アジア流域文化研究所・公開学術報告会「フィールドワークを楽しむ」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 ミッチェル図書館所蔵「モリソン文書」と新疆関連史料
3. 学会等名 第48回（2019年度）三菱財団人文科学研究助成「モリソン・コレクションの学際的・総合的研究：近代東アジア史と「アジア文庫」形成の資料的分析」第1回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小沼孝博
2. 発表標題 清朝皇帝とejen号
3. 学会等名 全球史視野下の歐亞大陸：第五屆清朝與內亞國際學術研討會 / グローバルな視点でみるユーラシア大陸：第五回清朝と内陸アジア国際学術研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本明志
2. 発表標題 近年の中国におけるモンゴル時代チベット史研究の動向
3. 学会等名 第7回チベット学情報交換会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoshi Ogura
2. 発表標題 Part V Early Modernity and Civilizational Apogee (ca. 1453-1683)
3. 学会等名 The Book Launch of the Wiley Blackwell History of Islam（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 南アジアにおけるサンスクリット古典の翻訳
3. 学会等名 ワークショップ「21世紀の人文知とは 世界の古典学から考える」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazushi Iwao
2. 発表標題 On Tibetan Buddhist Sites of North-Eastern Amdo Area at the Post-imperial Period and Their Origins
3. 学会等名 The 15th Seminar of International Association of Tibetan Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazushi Iwao
2. 発表標題 Census and Land Registration in Tibetan-ruled Dunhuang
3. 学会等名 旧紙弥新 敦煌古藏文文献学術研討会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩尾一史
2. 発表標題 四川・青海・敦煌：九、十世紀之西藏文化圈与交通
3. 学会等名 中日蔵学研究的現状 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木宏節
2. 発表標題 新解読のブルーミー文字碑文から見る前近代中央ユーラシア史の展望
3. 学会等名 前近代中央ユーラシア史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木宏節
2. 発表標題 モンゴルの大地と遊牧生活
3. 学会等名 神戸女子大学史学科特別講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshiyuki FUNADA
2. 発表標題 What Connects Mongol Rulers with the Chinese World: Imperial Edicts, a Literal Translation Style, and Spoken Chinese
3. 学会等名 International Symposium "Designing Voices and Letters: The Mongols as an Empire of Communication"（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 船田善之
2. 発表標題 モンゴル帝国統治層の根脚：身分秩序と類型
3. 学会等名 第64回東洋史学研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazushi IWAO
2. 発表標題 The Tibetan Empire and Multi-Ethnic Groups under Its Rule
3. 学会等名 首届藏学交流工作坊暨《蛾眉月》雜誌啓動儀式（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本明志
2. 発表標題 岡田英弘先生のモンゴル時代史研究とその後の展開
3. 学会等名 日本アルタイ学会第55回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本明志
2. 発表標題 チベット語典籍史料とモンゴル時代史研究
3. 学会等名 龍谷大学東洋史学研究会第42回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoshi OGURA
2. 発表標題 Additional annotations on Indic/Kashmiri non-Muslim cultures, traditions, and knowledge in the Persian translation of the Rajataranginis
3. 学会等名 17th World Sanskrit Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 近代以前の「ヒンドゥー」をめぐる自己・他者認識
3. 学会等名 日本南アジア学会30周年記念シンポジウム「ヒンドゥイズム再考：時代を超えた変動とその余白」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoshi OGURA
2. 発表標題 Revisiting Sanskrit Epic-Puranic Elements in Rashid al-Din 's History of India
3. 学会等名 Perso-Indica Workshop: Indic Texts and Islamicate Culture from the Ghaznavid to the Sultanate Periods (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小倉智史
2. 発表標題 デリー・サルタナト期パンジャーブ北部の土着集団について
3. 学会等名 平成三十年度東洋史研究会大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoshi OGURA
2. 発表標題 Between Story and History: Various attitudes toward Kashmir 's pre-Islamic past by historians of the Mughal period
3. 学会等名 International Conference on Persianate Literature in India and Anatolia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoshi OGURA
2. 発表標題 The A ' in-i Akbari and Western Indology: With Special Reference to the Category of the Six Schools of Philosophy
3. 学会等名 The Sixth Perso-Indica Conference The Classification of Indic Knowledge at the Mughal Court: the A ' in-i Akbari (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Atsushi NAKAMURA
2. 発表標題 Manjiin Uyeiin Khalkh dakhi shiljilt khodol goon
3. 学会等名 モンゴル国立大学歴史学部研究セミナー（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Atsushi NAKAMURA
2. 発表標題 Manjiin Uyeiin ortoo ba Khkhyn niigem: Cair us ortoonii jisheen deer
3. 学会等名 History of Eurasian Nomads: state, society and culture（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計16件

1. 著者名 櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉編，船田善之・山本明志ほか共著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 322
3. 書名 元朝の歴史：モンゴル帝国期の東ユーラシア（船田善之「元代「四階級制」説のその後：「モンゴル人第一主義」と色目人をめぐって」pp.19-30；山本明志「ジャムチを使う人たち：元朝交通制度の一断面」pp.31-44）	

1. 著者名 岩田啓介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 344
3. 書名 清朝支配の形成とチベット	

1. 著者名 李曉東編著，中村篤志ほか共著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 584
3. 書名 北東アジアにおける近代的空間：その形成と影響（中村篤志「駅の守人：モンゴル国ハラチン集団の歴史と記憶」pp.101-121）	

1. 著者名 吉澤誠一郎監修，鈴木宏節・山本明志ほか共著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 377
3. 書名 論点・東洋史学（鈴木宏節「遊牧帝国の形成と分裂」pp. 66-67；山本明志「チベットと仏教」pp. 134-135）	

1. 著者名 荒川正晴ほか編，岩尾一史・鈴木宏節ほか共著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 311
3. 書名 岩波講座世界歴史6 中華世界の再編とユーラシア東部：4～8世紀（担当：分担執筆，範囲：鈴木宏節「トルコ系遊牧民の台頭」pp. 115-145；岩尾一史「チベット世界の形成と展開」pp. 221-238）	

1. 著者名 荒川正晴ほか編，船田善之ほか共著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 295
3. 書名 岩波講座世界歴史7 東アジアの展開：8～14世紀（船田善之「キタイ・タングト・ジュルチェン・モンゴル：覇権の遷移とその構造」pp.81-112；船田善之「パспа文字とその史資料」pp.113-114）	

1. 著者名 八木久美子編，小倉智史ほか共著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 748
3. 書名 イスラーム文化事典 八木久美子編（担当：分担執筆，範囲：「異教徒との関係（南アジア）」「伝統文学（南アジア）」）	

1. 著者名 野田仁編，小沼孝博ほか共著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 244
3. 書名 近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照（小沼孝博「ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探求：『ハミード史』序論の検討から」pp.71-91）	

1. 著者名 中村篤志ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東北大学東北アジア研究センター	5. 総ページ数 244
3. 書名 移動と共生の東北アジア：中蒙露朝辺境にて（中村篤志「遊牧と移住のあいだ：20世紀前半期フルンボイル社会の動態から」pp.111-142）	

1. 著者名 岡洋樹編，中村篤志ほか共著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東北大学東北アジア研究センター	5. 総ページ数 434
3. 書名 ユーラシア遊牧民の歴史的道程（中村篤志「Manjiin Ueiin Kharchin ortoo ba Sair us（清代のハラチン 駅とサイル=オス）」pp.319-333）	

1. 著者名 岩尾一史・池田巧編, 岩尾一史・山本明志ほか共著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 790
3. 書名 チベットの歴史と社会 上下 (岩尾一史「古代期のチベット」pp. 7-25; 山本明志「モンゴル政権・明朝中国との接触とチベット社会の変容」pp. 54-73)	
1. 著者名 小松久男・野田 仁編, 小沼孝博ほか共著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 近代中央ユーラシアの眺望 (小沼孝博「遊牧民とオアシスの民, そして交易: モグール・ウルスからジューンガルへ」pp.14-31)	
1. 著者名 中国元史研究会・南京大学歴史学院・南京大学元史研究室 / 民族与边疆研究中心編, 舩田善之ほか共著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中国元史研究会・南京大学歴史学院・南京大学元史研究室 / 民族与边疆研究中心	5. 総ページ数 1426
3. 書名 色目 (回回) 人与元代多元社会国際学術研討会暨2019年中国元史研究会年会論文集 (舩田善之「蒙元帝国的統治秩序: 再論色目人」pp.189-190)	
1. 著者名 C.S. Radhakrishnan and Hari Dutt Sharma ed., Satoshi OGURA et al.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 DK Publishers Distributors Pvt. Ltd.	5. 総ページ数 89
3. 書名 Sanskrit in relation with regional languages and literatures: select papers from the Panel on Sanskrit in Relation with Regional Languages and Literatures at the 16th World Sanskrit Conference (28 June - 2 July 2015) (Turning Tarangini into Tarih: A Comparative Study on Jonaraja's Rajatarangini and its Persian Translation Composed at the Court of Akbar, pp.59-72)	

1. 著者名 Yasushi TONAGA and Chiaki FUJII ed., Satoshi OGURA et al.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学ケナン・リファーマー・スーフイズム研究センター	5. 総ページ数 375
3. 書名 Islamic and Sufi Studies in Academia: Rethinking Methodologies: Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series 3 (The Limits of the Oneness of Existence as a Medium in Translating Indic Deities' Names: The Case of Muhammad Sahabadi's Persian Translation of the Rajataranginis, pp.189-202)	

1. 著者名 小松久男・荒川正晴・岡洋樹編，鈴木宏節・小沼孝博ほか共著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 420
3. 書名 中央ユーラシア史研究入門（鈴木宏節「古代テュルク帝国を問い直す」p.25、小沼孝博「清代以降の新疆」pp.199-214）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

分担者の中村篤志は，モンゴル教育テレビ「教養セミナー」に出演（2018年10月2日放送）し，本研究の活動と成果の一部を現地に発信した。代表者の船田善之は，NHK BSプレミアム『プロファイラー』『フビライ・ハーン 世界帝国 日本に迫る』（2021年1月21日放送）及び同『プロファイラーIF』『モンゴルvs. 鎌倉武士 - 日本最大の危機 -』（2022年10月6日放送）に制作協力・インタビュー出演を，NHK『歴史探偵』『元寇 - モンゴル帝国の秘密 -』（2022年7月6日放送）に制作協力を，それぞれ行い，研究成果の一端を提供した。代表者・分担者は，市民講座や中高教員向けのセミナーなどにおいて，研究成果の社会還元にも積極的に努めた。

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	鈴木 宏節 (SUZUKI Kosetsu) (10609374)	神戸女子大学・文学部・准教授 (34511)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小沼 孝博 (ONUMA Takahiro) (30509378)	東北学院大学・文学部・教授 (31302)	
研究分担者	小倉 智史 (OGURA Satoshi) (40768438)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授 (12603)	
研究分担者	中村 篤志 (NAKAMURA Atsushi) (60372330)	山形大学・人文社会科学部・教授 (11501)	
研究分担者	岩田 啓介 (IWATA Keisuke) (60779536)	筑波大学・人文社会系・助教 (12102)	
研究分担者	山本 明志 (YAMAMOTO Meishi) (70710937)	大阪国際大学・基幹教育機構・准教授 (34429)	
研究分担者	岩尾 一史 (IWAO Kazushi) (90566655)	龍谷大学・文学部・准教授 (34316)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 遊牧社会の「日常」を描く：清代モンゴル史研究の新視角	開催年 2019年～2019年
--------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

モンゴル	モンゴル国立大学	モンゴル国立教育大学		
------	----------	------------	--	--